



戦時中のある一家 壮絶な歴史に迫る

戦時中に壮絶な経験をした一つの家族の歴史を中心に追った企画展「ある一家の十五年戦争」が、伊那市創造館で開かれている。富士見町に住んでいた小林家で、海兵として歴史的な戦いに身を投じた長男、満蒙開拓団で旧満州(現中国東北部)に渡り現地で亡くなった長女、陸軍衛生兵として戦いシベリア抑留から帰還した次男の手紙や日記などの資料を多く展示。市民から寄せられた戦争資料も並び、戦時中にあった上伊那の出来事をパネルで振り返っている。来年3月23日まで。

(藪原麻理子)＝15面に関連記事

伊那市創造館で企画展 来年3月23日まで

小林家は、伊那市誌編さん室の学芸員・瀧慎一さん(48)の祖父の生家。祖父の三平さんは10人きょうだいの次男で、16歳の時に満蒙開拓義勇軍に入り、その後陸軍に入隊し、シベリア抑留を経て帰還した。祖父は瀧さんが大学生のときに亡くなり、瀧さんは「なぜ、もっと話を聞いておかなかったのかとずっと後悔していた」と話す。7年前に小林家の蔵で、祖父やそのきょうだいの日記、手紙、写真など約2000点の資料を見つけた。数年かけて整理し、戦後80年に合わせて企画展を準備してきた。

海兵だった長男、富士雄さんは日中戦争や真珠湾攻撃、ミッドウェー海戦に参戦。戦艦「武蔵」に搭乗し、武蔵が沈没したレイテ沖海戦で戦死した。会場には真珠湾



海兵、満蒙開拓団、シベリア抑留——きょうだい残した当時の資料

攻撃前後の日記も展示され、当時の不安や興奮が記されている。長女の房江さんから妹や弟に宛てた手紙には満州の風景や暮らしがうつられている。

このほかに、特攻隊を指導した教官や特攻隊員の所有物、衛生兵が持っていた医療用具など市民から借りたり、寄贈されたりした資料もずらり。終戦前後の年に伊那東国民学校(現伊那東小学校)の卒業式で読まれた答辞も比較して展示され、子どもたちの世界が戦争一色の生活から一変したことがうかがえる。

瀧さんは「普通の家庭にこんなことが起きていたのか。教科書には載っていない歴史を実際の資料を通して知り、戦争について考えてほしい」と来場を呼び掛けている。

入場無料。午前10時～午後5時(最終入場は午後4時45分)。問い合わせは同館(電話0265・72・6220)へ。